

教職科目「総合演習」の意義と今後の課題

友 野 清 文

はじめに

教職科目の一つである「総合演習」は2009（平成21）年度入学生（2012（平成24）年度の4年生）までは必修科目であったが、2010（平成22）年度入学生からは事実上廃止される。（正確には「教職に関する科目」には位置づけられなくなる。）これは2008（平成20）年11月に教育職員免許法施行規則が一部改正され、「教職に関する科目」から「総合演習」がなくなり「教職実践演習」が加わったことによるものである。^{*1}多くの学生は3年生までに履修しているため、本年度の受講生はわずかであり、既に「消えた科目」となっている。

「総合演習」は教職科目としては異色なものであり、具体的な内容を持つものではなく、学生自身が自らのテーマを決めて、それについて調査・研究をし、その結果をプレゼンテーションや冊子等の形でまとめるという一連の作業を行う科目である。

「総合演習」は2000（平成12）年から導入されたが、これは1998（平成10）年の教育職員免許法施行規則の改正によるものであった。^{*2}その内容については、同規則第六条の別表の備考で、「総合演習は、人類に共通する課題又は我が国社会全体にかかわる課題のうち一以上のものに関する分析及び検討並びにその課題について幼児、児童又は生徒を指導するための方法及び技術を含むものとする」とされていた。また、「総合演習」の導入の提言を行った「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」（教育職員養成審議会第一次答申 1997年 後述）では「人間尊重・人権尊重の精神はもとより、地球環境、異文化理解など人類に共通するテーマや少子・高齢化と福祉、家庭の在り方など我が国の社会全体に関わるテーマについて、教員を志願する者の理解を深めその視野を広げるとともに、これら諸課題に係る内容に関し適切に指導することができるようにするため」とされていた。

本稿では「総合演習」が教職科目に導入された経緯を簡単に確認し、次に私が担当した本科目の概要を振り返り、学生からの意見を検討した上で、最後に「総合演習」後の課題を考えたい。

第1節 「総合演習」導入の経緯

「総合演習」導入の経緯を考えるに当たっては、高等学校以下の学校教育の内容の基準である学習指導要領改訂と大学での教員養成の改善という両面から検討する必要がある。

先ず学習指導要領について見ていきたい。1996（平成8）年の「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」（中央教育審議会第一次答申）で、今後の教育の目的としての「生きる力」が示された。やや長いがその部分を示す。

第1部 今後における教育の在り方

(3) 今後における教育の在り方の基本的な方向

また、今日の変化の激しい社会にあって、いわゆる知識の陳腐化が早まり、学校時代に獲得した知識を大事に保持していれば済むということはもはや許されず、不断にリフレッシュすることが求められるようになっている。生涯学習時代の到来が叫ばれるようになったゆえんである。加えて、将来予測がなかなか明確につかない、先行き不透明な社会にあって、その時々状況を踏まえつつ、考えたり、判断する力が一層重要となっている。さらに、マルチメディアなど情報化が進展する中で、知識・情報にアクセスすることが容易となり、入手した知識・情報を使ってもっと価値ある新しいものを生み出す創造性が強く求められるようになっている。

このように考えるとき、我々はこれからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を「生きる力」と称することとし、これらをバランスよくはぐくんでいくことが重要であると考えた。

「生きる力」は、全人的な力であり、幅広く様々な観点から敷衍することができる。

まず、「生きる力」は、これからの変化の激しい社会において、いかなる場面でも他人と協調しつつ自律的に社会生活を送っていくために必要となる、人間としての実践的な力である。それは、紙の上だけの知識でなく、生きていくための「知恵」とも言うべきものであり、我々の文化や社会についての知識を基礎にしつつ、社会生活において実際に生かされるものでなければならない。

「生きる力」は、単に過去の知識を記憶しているということではなく、初めて遭遇するような場面でも、自分で課題を見つけ、自ら考え、自ら問題を解決していく資質や能力である。これからの情報化の進展に伴ってますます必要になる、あふれる情報の中から、自分に本当に必要な情報を選択し、主体的に自らの考えを築き上げていく力などは、この「生きる力」の重要な要素である。

また、「生きる力」は、理性的な判断力や合理的な精神だけでなく、美しいものや自然に感動する心といった柔らかな感性を含むものである。さらに、よい行いに感銘し、間違った行いを憎むといった正義感や公正さを重んじる心、生命を大切に、人権を尊重する心などの基本的な倫理観や、他人を思いやる心や優しさ、相手の立場になって考えたり、共感することのできる温かい心、ボランティアなど社会貢献の精神も、「生きる力」を形作る大切な柱である。

そして、健康や体力は、こうした資質や能力などを支える基盤として不可欠である。（下線は引用者*3）

そして回答申では、この「生きる力」を育むためのコアとして「総合的な学習の時間」（以下、引用部分を除き「総合の時間」）を提唱した。該当部分は以下の通りである。

第2部 学校・家庭・地域社会の役割と連携の在り方

第1章 これからの学校教育の在り方

[5] 横断的・総合的な学習の推進

子供たちに「生きる力」をはぐくんでいくためには、言うまでもなく、各教科、道徳、特別活動などのそれぞれの指導に当たって様々な工夫をこらした活動を展開したり、各教科等との連携を図った指導を行うなど様々な試みを進めることが重要であるが、「生きる力」が全人的な力であるということを踏まえると、横断的・総合的な指導を一層推進し得るような新たな手だてを講じて、豊かに学習活動を展開していくことが極めて有効であると考えられる。

今日、国際理解教育、情報教育、環境教育などを行う社会的要請が強まってきているが、これらはいずれの教科等にもかかわる内容を持った教育であり、そうした観点からも、横断的・総合的な指導を推進していく必要性は高まっていると言える。

このため、上記の〔2〕の視点（「教育内容の厳選と基礎・基本の徹底」―引用者）から各教科の教育内容を厳選することにより時間を生み出し、一定のまとまった時間（以下、「総合的な学習の時間」と称する。）を設けて横断的・総合的な指導を行うことを提言したい。

この時間における学習活動としては、国際理解、情報、環境のほか、ボランティア、自然体験などについての総合的な学習や課題学習、体験的な学習等が考えられるが、その具体的な扱いについては、子供たちの発達段階や学校段階、学校や地域の実態等に応じて、各学校の判断により、その創意工夫を生かして展開される必要がある。

これを受けて 1998（平成 10）年、教育課程審議会は「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」を発表し、「総合の時間」の導入を含んだ新しい教育課程を打ち出したのである。

そして 2002（平成 14）年度から小中学校で実施された学習指導要領の総則において、以下のように規定された。^{*4}

第 4 総合的な学習の時間の取扱い

- 1 総合的な学習の時間においては、各学校は、地域や学校、生徒の実態等に応じて、横断的・総合的な学習や生徒の興味・関心等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うものとする。
- 2 総合的な学習の時間においては、次のようなねらいをもって指導を行うものとする。
 - （1）自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。
 - （2）学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすること。
- 3 各学校においては、2 に示すねらいを踏まえ、例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、生徒の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行うものとする。
- 4 各学校における総合的な学習の時間の名称については、各学校において適切に定めるものとする。
- 5 総合的な学習の時間の学習活動を行うに当たっては、次の事項に配慮するものとする。
 - （1）自然体験やボランティア活動などの社会体験、観察・実験、見学や調査、発表や討論、ものづくりや生産活動など体験的な学習、問題解決的な学習を積極的に取り入れること。
 - （2）グループ学習や異年齢集団による学習などの多様な学習形態、地域の人々の協力も得つつ全教師が一体となって指導に当たるなどの指導体制、地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること。

一方教員養成については、1997 年に教育職員養成審議会第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」において、これからの教員の資質として、「地球的視野に立って行動するための資質能力」「変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力」「教員の職務から必然的に求められる資質能力」の三点が掲げられた。そして最初の「地球的視野に立って行動するための資質能力」を育てる具体的方策の一つとして「総合演習」の導入が提案されたのである。

（a）地球的視野に立って行動するための資質能力を育てる

◎ 人間尊重・人権尊重の精神はもとより、地球環境、異文化理解など人類に共通するテーマや少子・高齢化と福祉、家庭の在り方など我が国の社会全体に関わるテーマ（詳細は上記（2）i）（a）参照）（略〔引用者〕）について、教員を志願する者の理解を深めその視野を広げるとともに、これら諸課題に係る内容に関し適切に指導することができるようにするため、「教職に関する科目」として新たに「総合演習」（仮称、2 単位）

を設ける必要がある。

この「総合演習」においては、上記のような諸課題のうちのいくつかについて選択的にテーマを設定した上で、ディスカッション等を中心に演習形式の授業を行うものとする。授業方法については、履修学年等に応じ、例えば、可能な限り実地の見学・参加や調査等を取り入れるなどして教員を志願する者が現実の社会の状況を適切に理解できるよう必要な工夫を凝らすことや、幼児・児童・生徒への指導という観点から指導案や教材を試行的に作成したり模擬授業を実施することなども、期待される。

以上のように「総合の時間」は学習指導要領改訂に伴い導入され、「総合演習」は教員養成の改善の一環として設置されたものであって、両者は直接関連しているものではない。しかし同時期に並行して進められたものであり、現代の諸課題について横断的・総合的な学習を行う時間として「総合の時間」が設けられ、同時に、これらの課題について学び生徒を指導することのできる教員の養成という点で、両者は密接に関係していると言える。

第2節 「総合演習」の概要

本節では、私が本学に赴任した2009（平成21）年度後期から担当している「総合演習」の概要について紹介したい。シラバスは以下の通りである。^{*5}

〔授業概要〕

生徒の知識活用力や問題解決能力を養うことのできる教師になるためには、先ず教師自身がそのような力量を持たねばならない。

本演習では、学生自身が自らの課題を見つけ、共同作業を通じてそれを追求していくこと、そのために必要な情報を入手する方法を知り活用すること、そしてその成果を整理し相互に伝え合うことを直接体験していく。そのプロセスを通して、情報収集能力・情報選択能力・自己教育力・コミュニケーション能力の基礎を培うことが期待される。

授業は基本的にグループ作業と全体の講義・発表（相互評価）の形式で進行し、学外を含む、学生の主体的な調査・研究活動を積極的に奨励していく。

〔授業到達目標及びテーマ〕

テーマ 「自分なりの課題を見つけ、それを多面的に検討しまとめる能力・技能を習得する」

到達目標 日本社会全体に関わると同時に、自分達にとって切実な課題を設定する力を習得する。

設定した課題についての検討・研究を進めていく能力と技能を習得する。

課題追求作業の中で、他者と協同していく力を習得する。

課題追求の結果を適切にまとめ、発表する能力・他者の発表を理解する能力を習得する。

以上を通じて、問題解決能力を育む教育を実践する能力の基礎を培う。

〔キーワード〕

①課題設定能力 ②課題追求能力 ③コミュニケーション能力

〔内容（学生の学修内容と準備学習の内容を含む）〕

科目の性格上、個人やグループで調べる活動が中心となります。授業では、作業の進捗状況の報告や意見交換を行います。

1. 〔全体〕 イントロダクション① 「総合演習」の趣旨・今後の予定等

〔準備〕 シラバスの確認

2. [全体] イントロダクション② 「総合的な学習の時間」の導入の経緯について
[準備] 「中央教育審議会答申」(1996 年)「教育課程審議会答申」(1998 年)を読む。
3. [全体] イントロダクション③ 「総合的な学習の時間」のねらいと内容について
[準備] 『中学校・高等学校学習指導要領 総合的な学習の時間』と『解説』を読む。
4. [グループ・全体] グループづくり・課題設定① グループ分け
[準備] 課題設定について考えておく。
5. [グループ] 課題設定② テーマ決定・今後の方針の検討
[準備] 課題の内容を検討する。
6. [グループ] 課題設定③ 具体的な調査・研究方法の決定
[準備] 調査・研究方法を確定する。
7. [グループ・全体] 課題追求とその成果の報告①
[準備] 報告の準備(進捗状況・問題点)
8. [グループ・全体] 課題追求とその成果の報告②
[準備] 報告の準備(進捗状況・問題点)
9. [全体] 中間報告会
[準備] 報告の準備
10. [グループ・全体] 課題追求とその成果の報告③(調査方法・日程の再検討)
[準備] 報告の準備
11. [グループ・全体] 課題追求とその成果の報告④(追加調査の検討)
[準備] 報告の準備
12. [グループ・全体] 課題追求とその成果の報告⑤(研究発表への準備)
[準備] 報告の準備
13. [全体] 研究発表と自己評価・相互評価①
[準備] 報告の準備
14. [全体] 研究発表と自己評価・相互評価②
[準備] 報告の準備
15. [全体] 個人レポート作成
[準備] 研究のまとめを行う。
研究のまとめを個人レポートとして提出

[評価基準と評価の方法]

点数評価とする。課題追求の過程・発表内容・個人レポートの内容等で総合的に評価する。

[参考書]

『平成 20 年 3 月告示中学校学習指導要領』『第 1 章 総則』『第 4 章 総合的な学習の時間』

『同 解説 総合的な学習の時間編』

『平成 21 年 3 月告示高等学校学習指導要領』『第 1 章 総則』『第 4 章 総合的な学習の時間』

『同 解説 総合的な学習の時間編』

授業計画の 4 回目以降は、クラスによって変動があるが、「テーマ選択・グループ設定 → 毎回の進捗状況の発表 → 中間報告会 → 補足の調査 → 最終報告会 → 期末レポート提出」という基本形は守るようにした。(グループで行った場合でも、最後の期末レポートは、評価対象となるため各自が提出することとした。)

内容や進行を考えるに当たって留意したのは以下の点であった。

第一は、科目のねらいを十分に学生に伝えることである。先に述べたように、「総合演習」は「総合の時間」と関連しているものであり、その背後には教育課程全体の見直しがあった。そのことを確認するために、最初の3回で、先に挙げた中教審・教課審答申や学習指導要領の「総合の時間」の規定を読むこととした。（小学校と中学校の学習指導要領は2008年、高等学校は2009年に各々告示されたので、授業では新学習指導要領を取り上げた。^{*6} 配付プリントの一部は※を参照のこと。）「ゆとり教育」と一部では批判的に捉えられている教育課程で「生きる力」が提唱された経緯を知ることが、現在でも重要である^{*7}（なお全ての授業においてではないが、余裕があった時には、「総合の時間」が導入された2002年7月にNHK（BS1）で3回にわたり放送された「インターネットディベート 総合学習」（1～3）の録画の一部を視聴したこともあった。小中学校の学習指導要領実施と同時に、文部科学大臣の「学びのすすめ」が発表されたことに象徴されるように、「学力低下論」をめぐる議論が行われていた時期であり、この番組でも「総合はお遊びの時間」といった批判が紹介されている。）

また2010（平成22）年度後期からは文部科学省『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開（中学校編）』（2010年11月）も紹介し、新学習指導要領での「総合の時間」の位置づけや意義についての確認をしてきた。

第二は、各自のテーマの選択については学生に一任したが、研究・調査方法についてはいくつかの注意をしたことである。具体的に調べるテーマはどのようなものでもよいが、調査・研究を行うに当たっては、できるだけ多面的に、様々な方法を使うことを指示した。そして小さな問題や課題であっても、それは社会全体あるいは世界の問題につながることを意識するようにということも強調した。また個人で行うか、グループで行うかも学生の選択に任せた。受講人数が多いクラスの場合、4～5名のグループと個人が混在することもあった。（自分の問題関心を大切にしたいと考えたので、あえてグループにはこだわらなかった。）実際に取り上げられたテーマは文末に「参考」として掲げたが、学科での学習に関係があるもの、全く個人的な関心によるもの、時事的な課題を取り上げたもの等、多様であった。

第三は、できるだけクラス内での意見交換が行えるように心がけたことである。基本的に研究調査は個人・グループでの授業時間外での活動となるが、毎回の授業では一週間の進捗状況を発表し、質問や意見を出し合うようにした。また中間報告の時には、全員にメモ用紙を配付し、報告への意見や感想とともに「もっと知りたい点」「これから調べて欲しい点」も書いてもらい、それを基に後半の作業をするようにした。最終報告でも意見・感想を出し合った。このように、学生相互の意見交換や助言の機会を作ることで、授業への参加意識が高まることを期待した。

※ 参考までに学習指導要領を読む際の配付プリントを次頁に掲げる。学習指導要領は通読しても頭に残りにくい文章であるため、少しでも理解を深めることを狙って、穴埋めの形式にし、学生が記入するようにした。また小学校・中学校・高等学校間の共通点と相違点に留意するようにした。

学習指導要領での「総合的な学習の時間」の規定

第1 目標

【小学校】

() 的・() 的な学習や() 的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、() 的に判断し、よりよく問題を解決する() や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に() 的、() 的、() 的に取り組む態度を育て、自己の() を考えることができるようにする。

【中学校】

() 的・() 的な学習や() 的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、() 的に判断し、よりよく問題を解決する() や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に() 的、() 的、() 的に取り組む態度を育て、自己の() を考えることができるようにする。

【高等学校】

() 的・() 的な学習や() 的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、() 的に判断し、よりよく問題を解決する() や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に() 的、() 的、() 的に取り組む態度を育て、自己の() () を考えることができるようにする。

第2 各学校において定める目標及び内容

【小学校】【中学校】【高等学校】

1 目標

() においては、第1の目標を踏まえ、() の総合的な学習の時間の目標を定める。

2 内容

() においては、第1の目標を踏まえ、() の総合的な学習の時間の内容を定める。

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

【小学校】

1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

- (1) 全体計画及び年間指導計画の作成に当たっては、学校における() との関連の下に、() 及び()、育てようとする() や() 及び()、()、指導方法や指導体制、学習の評価の計画などを示すこと。
- (2) 地域や学校、児童の実態等に応じて、教科等の枠を超えた() 的・() 的な学習、() 的な学習、児童の() ・() 等に基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うこと。
- (3) 第2の各学校において定める目標及び内容については、() や() とのかかわりを重視すること。
- (4) 育てようとする() や() 及び() については、例えば、() に関すること、() に関すること、() や() とのかかわりに関することなどの視点を踏まえること。
- (5) 学習活動については、学校の実態に応じて、例えば() 理解、()、()、() ・() などの() 的・() 的な課題についての学習活動、児童の興味・関心に基づく課題についての学習活動、地域の人々の暮らし、伝統と文化など地域や学校の特色に応じた課題についての学習活動などを行うこと。
- (6) 各教科、道徳、外国語活動及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが() 的に働くようにすること。
- (7) 各教科、道徳、外国語活動及び特別活動の目標及び内容との違いに留意しつつ、第1の目標並びに第2の各学校において定める目標及び内容を踏まえた適切な学習活動を行うこと。

- (8) 各学校における総合的な学習の時間の（ ）については、各学校において適切に定めること。
- (9) 第1章総則の第1の2及び第3章道徳の第1に示す道徳教育の目標に基づき、道徳の時間などとの関連を考慮しながら、第3章道徳の第2に示す内容について、総合的な学習の時間の特質に応じて適切な指導をすること。

2 第2の内容の取扱いについては、次の事項に配慮するものとする。

- (1) 第2の各学校において定める（ ）及び（ ）に基づき、児童の（ ）状況に応じて教師が適切な指導を行うこと。
- (2) 問題の解決や探究活動の過程においては、他者と（ ）して問題を解決しようとする学習活動や、（ ）により分析し、まとめたり表現したりするなどの学習活動が行われるようにすること。
- (3) （ ）やボランティア活動などの（ ）、（ ）、生産活動などの体験活動、（ ）・（ ）、見学や調査、発表や討論などの学習活動を積極的に取り入れること。
- (4) 体験活動については、第1の目標並びに第2の各学校において定める目標及び内容を踏まえ、問題の解決や探究活動の過程に適切に位置付けること。
- (5) （ ）学習や（ ）集団による学習などの多様な学習形態、地域の人々の協力も得つつ全教師が一体となって指導に当たるなどの指導体制について工夫を行うこと。
- (6) （ ）の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などの工夫を行うこと。
- (7) （ ）に関する学習を行う際には、問題の解決や探究活動に取り組むことを通して、諸外国の生活や文化などを体験したり調査したりするなどの学習活動が行われるようにすること。
- (8) （ ）に関する学習を行う際には、問題の解決や探究活動に取り組むことを通して、（ ）を収集・整理・発信したり、（ ）が日常生活や社会に与える影響を考えたりするなどの学習活動が行われるようにすること。

【中学校】（略 小学校と違う部分のみ空欄）

【高等学校】（略 小学校・中学校と内容的に違う部分のみ空欄）

第3節 「総合演習」に対する学生の意識と評価

次に本科目に対する学生の意識と評価を見ていきたい。

期末レポートに授業への感想・意見を書いてもらうようにしており、そこでの記述から学生の考えを知ることができる。また本稿執筆に当たり学生へのアンケートを実施し、改めて「総合演習」についての意見を集約した。^{*8} 両者の内容を紹介した上で、ここから知ることのできる学生の考えや授業への評価を検討する。

第1項 期末レポートの記述について

まず期末レポートの記述は以下のようなものである。^{*9} 学生には「総合演習」についての意見や感想の他、「総合の時間」への考えも書くように求めた。

- ・小中高と総合の時間はあったけれど、調べることなど先生に決められていてすごくつまらない授業だったという記憶しかないが、今回自分たちの興味のあることを調べて発表するというのはすごく面白かった。私たちは今はもう大学生で、ある程度自由があるから好きなことを調べられたが、小中学生は調べる内容も絞られどこかつまらなく、自ら進んで意欲的に調べるといったことはしないのではないかと思います。それは実際に私がそうだったからである。（日本語日本文学科 2年）

- ・本授業で実際に自分自身で調べ学習をして、小学校のときに受けた総合学習とはまた違ったことを感じた。小学校のころは自分の興味を持っていること、時間を使いたいことが自分自身で把握できていなかった。だから仲の良い友達と興味があるわけでもないことについて調べてまとめて発表して、それで終わっていた。今回の授業を終えて、大学生になってやっと、自分の興味のあることが把握できて、そこから知識を得ることができるようになったと感じた。(英語コミュニケーション学科 2年)
- ・「総合学習」を生かせるかどうかは「教師の力次第ではないか」という考えに行き着いた。簡単に言えば、積極的で斬新で魅力的な力のある教師の指導のもとで学ぶ総合学習は子供たちにとって将来の「生きる力」となり、力のない教師のもとで学ぶ総合学習は無駄な時間を過ごすお遊び学習になってしまうということだ。(心理学科 2年)
- ・グループでの総合演習を通じて、自分たちでテーマを設定し調査方法もそれぞれで、自発的に活動に取り組むことができた。子どもたちにとっても「自発的に取り組む」ということは総合学習のうえで重視されるべきだと思う。普段の生活の中から課題(テーマ)を見つけ、解決に向けて取り組む力が今の子どもたちには求められているのではないかと。自分なりに調査してまとめ、周囲に表現・発信する力を育てる、これは自己表現を助け、自分なりに学習を進めることは、子どもの自信にもつながると考える。(心理学科 2年)
- ・何か1つ興味のある事を深く深く調べ上げ自分の知識・教養にする事。それが総合演習の一番の狙いではないかと思いました。ポイントは自分の興味関心のあること、そしてインターネットや本から情報を得て来る、文章や図を使って見やすくわかりやすいように工夫する、そして発表を通して自分自身で調べた内容についてみんなに説明しながら頭の中を整理する。結果的に自分の教養として身につく。このサイクルを繰り返すことによって教養が成長と共に身についていくのだと思います。ゆとり教育の見直しによって総合的な学習の時間はなくなってしまいかもしれません。しかし学校で授業としてとりくまなくても子どもの興味を興味だけで終わらせず、そこからもっと発展していくようにサポートするのが教師の役目だと思います。(環境デザイン学科 2年)
- ・せっかくの「総合の時間」なのだから、その時間を基礎学力の向上にあてるよりも、この時間にしかできないことをする方が意義があると思う。普段できないようなことを体験する授業は子供たちの興味関心を広げることにつながるし、体験だけでなく事前学習・事後学習をきちんと行うことで教科の学習との連携を図ることもでき、教科の学習へのやる気を起こし、基礎学力の向上にも結果的につながるのではないかと思う。結局、どんな内容をやるかというよりも、どんな方法でやるか、どれだけ学校・地域・家庭での連携が取れるか、どこまで子どものやる気を引き出せるか、にかかっていると思う。(管理栄養学科 2年)
- ・総合的な時間とは、人とより密接につながる時間なのだと感じた。総合的な時間を英語の時間に使うにしろ、基礎学習の発展に使うにしろ、コンピュータ操作の時間に使うにしろ、対峙するのは、心・考えを持った人、もしくは人が思いを込めて作ったものである。自分が教師になって総合的な学習の時間を受け持った時は、子供の興味・関心を引き出せるサポートができるよう心がけたい。(日本語日本文学科 2年)

第2項 アンケートについて

次にアンケートの結果である。冒頭で述べたように3年生(2010年度入学)以下は「総合演習」を履修しないので、本科目を履修した在学生は4年生のみとなる。そのため4年生を対象としたアンケートを2012(平成24)年5月に実施した。この時点で教職課程を履修している学生の中で、72名にアンケート用紙を配付し、回収は27名(38%)であった。授業等で会う機会のある4年生が少なく、教育実習直前という時期であったため、回収率は高くなかった。

結果の概要は以下の通りである。^{*10}

○ 回答者の所属学科

日本語日本文学科 4人 英語コミュニケーション学科 8人 歴史文化学科 4人
健康デザイン学科 6人 管理栄養学科 5人 計 27人

○ 履修の時期 [設問 1]

2 年前期 5 人 2 年後期 8 人 3 年前期 9 人 3 年後期 5 人

○ クラスの受講人数 [設問 2]

1	5 人以下	2 人
2	6 人～10 人	13 人
3	11 人～15 人	4 人
4	16 人～20 人	6 人
5	21 人以上	2 人

○ 研究調査の形態 [設問 3]

個人	12 人
グループ	15 人

○ 「授業としての『総合演習』についてはどう思いましたか。」 [設問 4] (複数回答可)

1	おもしろい	20 人
2	興味深い	17 人
3	面倒くさい	3 人
4	つまらない	0 人
5	(内容が) 難しい	0 人
6	(内容が) 易しい	3 人
7	(単位取得が) 難しい	0 人
8	(単位取得が) 易しい	9 人
9	その他	1 人

(具体的に: 授業の前半は学習指導要領についての内容だったのでつまらないと感じたが, 研究調査になってからは興味深くなり, 研究調査したことをレポートにしたのでやりっぱなしにはならなかった。)

○ 「『総合演習』を通して, 教師に必要な力の基礎を得られたと思いますか。」 [設問 5] (どれか一つに○)

1	思う	16 人
2	思わない	1 人
3	分からない	10 人

[自由記述]

「1 思う」について

- ・調べ方は何に焦点ををぼるかなど実際にやってみて学ぶことがあった。また, 先生が, 決めたテーマについての様々な知識や情報を教えてくれたので大変助かったし, 私もアンテナを張り知識をつけ, ヒントになること

を教えたいと思った。

- ・子ども達に対してどのように授業をおこなっていけばよいのかを理論的な面と実践的な活動を通して学ぶことができた。
- ・教科以外での学びの場を生徒に教える前に、自分がどう学ぶかが分かったのでよかった。
- ・生徒が成長していくのを見守るのは簡単だが、指導していくのはとても大変だ。教科に関してでなく、日頃の学校生活において生徒に声かけをしていくにあたり、総合演習でみんなと意見を交わすことは、客観的な見方にもつながるので大事なことだと思う。客観的に物事を判断する力は教師にとって必要な力だと思う。
- ・自分で調べた内容を相手に伝えるので、わかりやすく物事を伝える力を身に付けることができるのではないかと感じました。
- ・資料をまとめる力、発表する際に必要な技術が身に付いた。
- ・配布されたプリントを通じて教育現場について考えることができ、発表においても教えるという力を身につけていく上で必要なことであったと思いました。
- ・グループ内でテーマ、役割を決めたり、授業外の時間に自ら積極的に活動することが多かったため、グループという組織で動くためにはどうしたら良いか、とても考えさせられた。また最後、グループごとに発表をし、その準備もとても大変だったが、達成感をえることができた。
- ・教師として、児童・生徒に分かりやすく伝える力が訓練されたのではないかと思う。毎週、自分のテーマについて調べたことを発表していくことで、自分の考えを相手に伝える力を自然と身につけていけたと思う。
- ・大勢の前で話すことは滅多にないので良い機会になった。
- ・テーマを決めて、本やネットやフィールド調査を行い、レポート作成し、パワーポイントを上手く作って発表を行った点は、教壇に立って授業をするのに力になったと思います。
- ・様々な分野の発表を聞くことができたのは、人それぞれ興味を持つところが違うからであり、それは色々な考えを持った人がいるという事だと思います。その事を再確認できるのが「総合演習」だと思いました。
- ・あることについて学習させる時に一つの面から調べる・アプローチするのではなく、様々な面から調べる・アプローチし、その中で得た情報のうち必要な情報を選んで教える、伝えるという力が得られたと思う。
- ・(「少し思う」) 自分が総合の内容を実践するのではなく、どのように総合のカリキュラムをつくるのか、どんな内容が好まれるのかを学びたかった。

「2 思わない」について

- ・教師に必要な力というよりは、1つのことを調べる力がついたと感じる。学生として探求する力がついたというイメージ。

「3 分からない」について

- ・私自身学生時代にいわゆる「総合的な学習の時間」という時間に受けた授業があいまいなものだったため、何を基準にして得られたかどうかを答えればよいのかわからない。
- ・総合的な学習の時間の意義と役割については学ぶことができたが、グループワークや発表等を通して教師に必要な力の基礎が得られたかどうかは分からない。
- ・個人で調べることで、課題を設定すること、それを解決することを体験はできたが、それを指導できるかどうかというところまでできないと思う。
- ・各自が自分の好きなテーマを選んで調べ発表したが、大勢の前で発表するのは教師としての特質を伸ばすのによいと思った。
- ・総合的な学習の時間における教育の目的・目標は理解できたし、研究調査に行ったことで学校や子どもに対する興味・関心は湧いたが、教師に必要な力の基礎を得られたとは言えないと思う。
- ・先ず教師に必要な力の基礎というものをはっきり分からない。何を求めているのかははっきりしてほしい。
- ・調べる過程を通し、自分自身の勉強になったとは思っているが、「教師として必要な力の基礎」が得られたかは今

はわからない。

- ・グループワークを行うという点では、共同して何かを行う協調性を身に付けることが出来たのではないかと思います。
- ・教育に関することについて調べたので知識はついたと思います。アンケート作成、レジュメをまとめ発表する過程。
- ・みんなの前で内容を相手にわかりやすく説明する力が得られたと思う。この力は教師には不可欠だと思った。

○「教職科目としての『総合演習』の意味はあったと考えますか。」[設問 6] (どれか一つに○)

- | | |
|------------|------|
| 1 意味がある | 8 人 |
| 2 やや意味がある | 12 人 |
| 3 あまり意味がない | 2 人 |
| 4 全く意味がない | 0 人 |
| 5 何とも言えない | 3 人 |
| 6 分からない | 2 人 |

[自由記述]

「1 意味がある」について

- ・自分の研究調査に関してだけでなく、他の人が調査している内容も毎週話を聞くことができるので、新たな教養が増えていくことが実感できる。生徒と接する際に話の種にもなるし、マメ知識として指導もできるので、教職科目として意味がある授業だったと思う。
- ・学習指導要領の内容にも若干触れながら、「総合演習」とは何を学ぶ場であったかを知ることができた。また、研究調査を行い、それについてのプレゼンテーションを行ったことで、「人に伝える」ことの重要性を知ることができた。
- ・特に発表の場があったことが良いと感じました。又、様々な学科の方が集まることで、今まで知らなかったことを知る機会になったと思います。
- ・今までの教職科目の中で唯一グループで作業をする科目だったので、この科目がとても印象強く残っている。とても充実した科目であったと思う。
- ・教師として、自分の考えを相手にプレゼンテーションする能力や、1つのテーマについて様々な方法で調べ上げる情報収集能力などを身につけることができたため、教職科目としての意味は大いにあったと思う。
- ・広い視野を持つことができるという点で意味があったと考えます。
- ・先生が、自ら学習する時や、グループワークをして皆の前で発表する時などの場面で、総合演習で学んだこと、行ったことを生かし、生徒に適切なアドバイスができると思う。
- ・普通の授業以外に興味を持たせる発表をさせることは生徒の自立にもつながるので意味はあると思う。

「2 やや意味がある」について

- ・具体的に生徒が体験する総合の時間を、自分が生徒になったように取り組めたと思う。そのような意味では意味があった。だが、授業は30分程度で終わるものだったため、座学による知識の教授はあまり行われず、その程度のものなのかと思った。
- ・調べたことについて相手にプレゼンするという形は授業を児童・生徒に行うということに直結するため教職科目としての意味はあると思いますが、題材についてはどこまでも突きつめることができるため少し時間が足りないかな、とも感じました。
- ・総合的な学習の時間の本来の意義を学べたことには意味があったと思う。グループでテーマを設定して調べて

発表するという形式も授業としては楽しかったが、高校までの総合の延長といった感じで、今考えてみると教師の立場からではなく生徒の立場として取り組んでいたと感じる。もう少し教師になるための資質を養う教職科目であることを意識していれば、より意味のあるものにできたのではないかと思う。

- 色々な面から自分の知りたいことを調べて学べたから。
- いろいろな分野についてそれぞれが追究し、発表しあうことで勉強になった。
- 社会での問題や異文化交流、歴史等について理解を深め、適切に指導することができると思った。
- 総合的な学習の時間の意味を理解できた点は意味があったと思う。各自研究調査を行ったのも良いと思うが、自分で設定して（ex 中学2年の総合の時間）生徒にどんなことをやらせるのかを考えるような課題でもよかったのではないかと思う。その方が実践的な気がした。
- 発表に重視が当てられた授業に思え、教育の内容をもっと深く学べればよかったと思います。
- 生徒に自主的に学習させるためまず自分がやってみて、時間配分や、次に何をさせたいのかというのがよかった。

「3 あまり意味がない」について

- “教師としての力”は養われなかったような気がする。

「5 何とも言えない」について

- 児童・生徒たちにとってはこれからの時代、受け身の学習よりも主体的に自ら学び、疑問を追究していく姿勢が必要だと思うため、意味はあると思う。しかし、教える教師自身があまりやり方（授業の進め方）を理解していないため、現時点ではあまり意味がないと思う。文科省の意向、考え、方針を文書ではなく、直接話を聞くなどしてきちんと理解した上でこの授業を行うのであればそれなりの意味はあると思う。
- 調べる能力やプレゼン能力はついたかもしれないが、教職科目として、となると何とも言えない。
- 総合学習そのものが疑問視されていることを踏まえると必要であったのかわからない。しかし、共同でテーマを決め、研究を行うということを経験したことは、生徒への指導に何かしら役に立つのではないかと思う。

「6 分からない」について

- 私の場合、一つのテーマについて他学科の学生と共に意見を出し合い、自分の担当分について（足を動かし、現地に行くなどして）調べたことは、とても意味があったと思う。また、個人的にも勉強になった。

○「『総合演習』についての意見や感想・思い出などがあれば自由に書いてください。」[設問7]

- 自分でアボを取り、外に出かけ調査をし、まとめるというのはプチ卒業論文みたいだと思っていました。でも自分が好きなテーマに取り組めるし、だからモチベーションは下がらないので楽しく続けることができました。もっと先生よりアドバイスをいただきながら、課題設定を行いたかったかなと思いました。授業で集まったときに経過報告をしなければならないのはいいなと思いました。
- 自分が興味があることの他にも、自分が全く思いつかなかった題材に触れることができ面白かったです。授業は少人数で行ったため、普段の授業より対話やコミュニケーションが多く、その点がとても良かったです。
- 少人数で行われたことが、自分にとって非常によかった。総合的な学習の時間で自分が取り上げた課題を授業で発表することも意見をもらうことも、両方メリットとして得られたことを嬉しく思う。
- 私たちの回は、先生を含めて7人という大変少ない時間帯であった。人数が少なかったため、しょうがないところもあるが、1人が提起した議題（話題）についてもう少し激しい討論ができれば、自分の考えを言葉にして他人に伝えるという機会はあまりないので良かったのではないかと思う。
- 研究調査で、テーマを設定し、それについてグループで協力して調査を行い、発表したことが印象深い。自分が発表したことだけではなく、他のグループの発表を聞き、普段勉強しているそれぞれの学科によってテーマ

の設定に特徴が出ていることを感じた。

- ・実際にその場所に行って調べられたことで、インターネットや本からだけの情報ではなく感じたことやその場で聞いた「まめ知識」を含め書けた。
- ・自分の興味ある分野について文献を基に調べて、まとめることにより、発表することに対して意義を見つけられた。また人前で話すことに対して抵抗を感じなくなった。
- ・3人という少人数で授業を行いました。お互いに意見を出していくことで、とても濃いものになったと感じています。
- ・なくてもいいと思う。
- ・授業外の活動が多かった。2年の後期という比較的時間のときに履修できて良かったが、他の時期だと結構大変かな…と思った。
- ・少人数で授業ができ、各々のテーマについて深く話し合えたことがとても面白く、充実していました。
- ・授業の前半は、学習指導要領を読む等で「総合の時間」について学べてよかった。後半は調査研究で、各自調べたことを中間発表などで発表し、最終的にレポート提出という形だったが、研究調査に当てられた時間が多いうように感じ、私自身だらだらと取り組んでしまっていた。中間発表に対する感想や指導を紙面でいただけたのは良かったと思う。
- ・違う学科の学生もいたので色々の研究調査のテーマがありとても良かった。ただ、総合演習の思い出というアンケートを作り、スライドを作って発表したということだけしか記憶にないので、もう少し学生に記憶に残るようなことをしてほしかった。
- ・少人数のクラスだったので、学科のかきねを越えて、授業中ではありますが自由に発言できる授業だったと思います。
- ・他学科の人と交流はめったにないのでおもしろかったです。発表の時間もしっかりとってもらえたので充実していたと思います。各授業の進度のミニ（プチ）報告の際に、レポートのようなものを提出するのかどうかは、もう少し詳しい指示があると良かったと思います。
- ・テーマについてどのように調べるか（本を読む、現地へ行き地元の方に聞くなど）ということを考え、実行することで勉強になったと思う。教師としては子どもたちと（に）「総合的な学習の時間」を作っていくかは、実際には悩み所だと感じている。（“自由研究”で具体的に何をすればよいかわからないのと似ている）
- ・自分が今まで興味がなかったことでも、他の人の発表で関心を持つことができました。自分が調べた事についても、今まで深く調べる機会がなかったので、「総合演習」で調べることができ、更に知識を得ることができ、よかったと思います。
- ・調べたことをどの程度まで発表するか、どのようにして発表すれば分かりやすくなるかという点で悩んだ。その全てが必要ではないし、限られた時間の中で相手に理解してもらえるにはどのようにしたらよいかと苦労したが、この経験を教育実習に生かしたい。
- ・個人的には調べ物をパワーポイントで発表という形がとても楽しかったが、教師になってから役立つのかというと、何てお答えしてよいかは分からないが、PCの操作などをより深く使いこなすためにはよいと思った。けれども、発表の際に紙面上だけで終わらせてしまった人を見ると、一概にはよいとは言えない。
- ・初めは「総合演習なんて意味があるのか」と考えていたが、受講してみて、自ら進んで何かに取り組むことは大切なことではないかと思った。教職を取っていない人も受講したほうが良いのではないかとさえ感じた。

第3項 期末レポートの記述とアンケートについての考察

先ず期末レポートについては、2年生前期のものを取り上げたこともあって、高校までの経験と引き比べて「総合の時間」について改めて考える機会となったと述べているものが多かった。また、基礎学力と総合的な学習とは対立するものではなく後者を進めることで前者も向上する、自らの課題を見つけることは難しく教師の指導が欠かせない、「総合の時間」の成否は教師にかかっている等という意見が見られた。「総合演習」自体についても、自らが課題を決め調べていくことが学習にとって

重要である、発表する機会が得られた等という意見があった。期末レポートであるので否定的な意見は書きにくいということを割り引いても、多くの学生は本科目の意義を肯定的に考えていたことが窺える。

次にアンケートについては、私が主に確認したかったのは以下の3点である。

- 1 「総合演習」についての全体的評価（設問4）
- 2 「総合演習」で得られた力（設問5）
- 3 教職科目としての「総合演習」の意味（設問6）

2と3については、本来は教師になって経験を積むことで初めて分かることだと考えるが、4年生の教育実習に行く前の段階で、学生が教師に必要な資質についてどう考えているのかを知りたいという思いもあって、敢えて設問項目とした。

設問4については多くの学生が「おもしろい」「興味深い」を選んでおり、概ね肯定的であった。単位取得も「難しい」と感じている学生はいなかった。事実上平常点が全てであるので、普通に授業に参加しておれば「単位が取れない」という不安はなかったと思われる。

設問5については、「教師に必要な力の基礎」が得られたかについて「思う」と「分からない」に分かれた。

「思う」と答えた学生が得られたと考えている力（能力）は以下のようなものである。

- ・調査研究を行う力（課題設定・方法選択等）
- ・資料をまとめる力
- ・発表する力、人に伝える力、人前で話す力
- ・他者と協同する力（協調、役割分担等）
- ・他者を理解する力

他方「思わない」「分からない」を選んだ場合、授業で何も得られなかったということではなく、上のような力は（幾分なりとも）得られたが、それが「教師に必要な力」かどうか、あるいはこれで十分なのかどうか分からないと考えていると言えよう。

設問6については、本科目が教職科目として意味があるかどうかという問いに対して「意味がある」「やや意味がある」が27名中20名であった。「意味」として挙げられたのは以下のような点であった。

- ・情報収集能力、発表（プレゼンテーション）能力等、教師に必要な力が得られた。
- ・他の人の発表を聞くことで知識や興味の範囲が広がった。
- ・広い視野を持つことができた。
- ・グループワークを行う等自分が生徒の立場となって取り組むことができた。

同時に授業の内容として不十分だった点としては、以下の点が指摘されていた。

- ・教師として「総合の時間」の計画や運営をするという視点がなかった。
- ・研究調査の内容についての指導があまり行われなかった。
- ・「教師に必要な資質」が明確にされていない。

設問7「意見・感想・思い出」については、設問5・6と重複する内容に加えて以下のような点が

述べられていた。

- ・少人数であったので、十分な話し合いができた。
- ・他学科の人と一緒にあったので、視野が広がった。
- ・実際に出かけることで大変勉強になった。

第4節 「総合演習」の意義と今後の課題

学生は本科目で、課題設定・調査研究・他者との協同・情報の整理・発表等のプロセスを通して、これらに関わる力が養われたと考えていることが分かる。これはシラバスに掲げた「テーマと到達目標」の内容と一致しており、本科目の目標は達成されていたとすることができる。もちろん、学生の記述は主観的なものではあるが、私自身の学生への評価（日常の授業での姿勢、発表の内容と態度、期末レポート）でも、このような力の基礎が身に付いたと言える学生が多かった。その意味では本科目は、「総合の時間」の指導に留まらず、教師としての力量形成に少なからぬ意義を持っていたと考えてよい。

冒頭で述べたように来年度からは「総合演習」に替わり「教職実践演習」が導入される。両者の教職科目としての位置づけと具体的内容は異なるものであるが、「実践的指導力の養成」という目的は同一である。その点では教職科目唯一の演習科目として、学生自身の活動を中心とした学習を行う場という性格は引き継がれるものである。「教職実践演習」については2012（平成24）年7月現在、本学ではその具体的内容を検討中であるが、本稿の内容を踏まえて以下のような提言を行いたい。

- 1 少人数学習の要素を取り入れること。
- 2 他学科の学生と日常的に交流できる場にする。
- 3 「教員に必要な資質」について学生自身が考える機会を多く提供すること。

1と2については、「総合演習」の意義として多くの学生が指摘していた点であり、この特長は是非これからも生かせるようにしていきたい。3については、言葉としては説明されることが多いであろう。（1997年の教育職員養成審議会で示された「今後特に教員に求められる具体的資質能力の例」や、各教育委員会が提示している「求められる教師像」等）しかしそれが学生の実感として感じられるには至っていない場合が殆どである。「総合演習」ではこの部分には十分に対応できなかったが、「教職実践演習」では「介護等体験」や「教育実習」を経ているので、学生の体験を踏まえた指導が可能になる。先に触れたように、本科目を提唱した中教審答申においても「教員として最小限必要な資質能力の全体について、確実に身に付けさせるとともに、その資質能力の全体を明示的に確認する」ことが目的とされており、学生自身が自覚的に「確認」をできるようにしていくことが重要である。

「教職実践演習」が、卒業後直ちに教職に就かない学生を含めて、教職課程の総仕上げとして「実践的指導力」育成のための科目となるよう、取組を進めながら更に検討をしていきたい。

おわりに

2009（平成21）年度後期から本科目を担当することになり、私自身の勉強もその時から始まった。授業開始前には、参考文献を探して読んでみたりネットで資料を探したりしたが、具体的な進め方については実際に教室で学生と顔を合わすまでは何も思い浮かばなかった。そのような私に対して、授業開始時から現在まで様々なご指導を頂いている小池俊夫先生にはこの場を借りて改めてお礼を申し

上げたい。また本科目の運営でお世話になった総合教育センター助手の内田久美子さんにもお礼を申し上げる。

授業の方はいざ始まってみると、私自身が「総合演習」を楽しむことができた。それは何よりも、積極的に参加してくれた学生のお陰である。毎週の報告を聞いて、学生の関心の広さと深さに感心させられたこともしばしばであった。そして私自身が多くのことを教えられた。授業では私の戸惑いもあり十分な指導や援助ができなかったのでは、という思いが今は残っているが、学生の皆さんには心から感謝をしている。

本稿を書いたのも、消えてしまう「総合演習」での学生の貴重な活動を記録に残しておきたいという思いからであった。この内容についての責任はもちろん私にあるが、本稿を実質的に執筆したのは「総合演習」を受講した学生の皆さんである。

特にお忙しい中アンケートに協力して下さった4年生には心からお礼を申し上げる。何名かの学生にはアンケート用紙を配ることまでお願いしたが、快く引き受けて頂いて本当にありがたく思っている。

また今回改めて2年半分の期末レポートを読み返したが、それほど昔のことではないにも拘わらず、懐かしさを感じるレポートが多かった。毎週の授業での様子や発表を思い返すこともあった。ここではその内容を十分に紹介することはできなかったのも、改めて別の機会に整理をしたいと考えている。

参考 学生が取り上げたテーマ

以下は私が担当した授業で取り上げられたテーマの一覧である。(学期ごとにレポートのタイトルを示した。括弧内は私が担当した授業の開設曜時である。)

先にも触れたように、私はテーマの選択は完全に学生に任せたため、選ばれたものは学科での学習に関連するもの、個人的な興味関心によるもの、時事的な内容を取り上げたもの等様々であった。テーマ自体は身近なものであっても、これらは「人類共通の課題」や「我が国社会全体に関わる課題」に結びつくものであり、学生自身がそのことを実感する機会になったと言える。

研究調査の方法は、文献探索の他、アンケートの実施(多くは同じクラス・学科の同級生対象)、現地調査、自らの体験等多様であったが、少数ながらネットのみに頼ったと思われるものも見られた。

2009 年度後期(金1)

- | | |
|-----------------------|---------------------------|
| ・Jリーグ「アルビレックス新潟」の経営戦略 | ・三軒茶屋 |
| ・モンスターペアレントについて | ・戦国武将前田慶次の実像とゲームキャラクターの比較 |

2010 年度前期(火1・金4・金5)

- | | |
|----------------------|----------------------|
| ・化粧 | ・アニメ・マンガによる影響とは |
| ・日本と外国の比較 恋愛における相違点 | ・中高生における政治・社会に対する意識 |
| ・三軒茶屋 | ・千葉の銘菓・お土産 |
| ・「スターバックスコーヒー」について | ・日本と海外におけるの平和意識と平和学習 |
| ・東京デートスポット | ・様々な国の結婚 |
| ・豆 | ・携帯電話の必要性 |
| ・アニメゆかりの地ガイド | ・となりのトトロの都市伝説 |
| ・日本に住む外国にルーツを置く子どもたち | ・郷土料理 |

- ・ファーストフード店の戦略「マクドナルド」
- ・子どもの朝食欠食について
- ・日本に住む外国人
- ・子どもの運動能力について
- ・うつ病

- ・孤独について
- ・お菓子が私たちに及ぼす影響
- ・手話について
- ・教育勅語

2010 年度後期（火 1・火 4・水 1）

- ・方言について
- ・言葉の理解度調べ
- ・ビールと発泡酒の違い
- ・世界の教育事情～日本と各国を比較する～
- ・大学生の学力は何によって生じるのか
- ・変わりゆく日本の教育環境
- ・都心のこども 地方のこども
- ・一般に知られているおとぎ話とその原作の差違
- ・ディズニーについて
- ・学校と塾の役割について
- ・グルメ大国ベルギーについて
- ・子どもたちのケータイ依存
- ・「朝の読書」について
- ・SNS について
- ・フランスの教育について
- ・コンビニのおにぎりの恐怖
- ・方言が持つイメージについて
- ・女子大生の携帯依存について
- ・アレルギーと花粉症について
- ・空間デザイン
- ・日本各地の郷土料理 「お雑煮」について
- ・「草食系男子」について
- ・妖怪と人間との関わり～妖怪の魅力を探る～
- ・ダイエットについて
- ・食生活の影響について（摂食障害も）～食と心～
- ・にくめない悪役像について

2011 年度前期（火 1・金 4・金 5）

- ・米国で人気のアニメ・漫画
- ・お金の歴史
- ・妖怪研究
- ・アジアにおける早期英語教育比較
- ・美術館での親子プログラムがいかに
行われているのかについて
- ・1960 年代のアメリカ
- ・携帯電話の変遷
- ・小学校英語の必修化について
- ・学校給食について
- ・3.11 その後 教育の現場
- ・ジブリ映画『千と千尋の神隠し』から学ぶ
- ・宮崎駿の自然観—『となりのトトロ』を中心に—
- ・ジブリ映画から見る自然観～『もののけ姫』を通じて～
- ・コンタクトレンズと眼
- ・間違ったダイエットの危険性
- ・快適な睡眠法
- ・糖尿病について
- ・留学生が戸惑う日本語のあいまいさについて
- ・子どもと自然の関わり
- ・差別表現について
- ・食育について
- ・奥州平泉

2011 年度後期（火 1・水 1）

- ・コミュニケーション
- ・若者言葉
- ・給食と放射能
- ・フィンランドの英語教育: 日本の英語教育への示唆
- ・子どもの安全
- ・ディズニーリゾートができるまでとその工夫
- ・ラーメン人気の秘密に迫る！
- ・トイレの歴史

注

- *1 「教職実践演習」は中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（2006 年 7 月）でその導入が提唱された。答申では「今後、教職課程の履修を通じて、教員として最小限必要な資質能力の全体について、確実に身に付けさせるとともに、その資質能力の全体を明示的に確認するため、教職課

程の中に、新たな必修科目（「教職実践演習（仮称）」）を設定することが適当である。」とされていた。

- *2 教育職員免許法施行規則の改正は、教育職員免許法の改正に対応したものであった。1998 年の免許法改正は戦後最大の改正と言われ、教職に関する科目の大幅な単位増が行われた。なお義務教育学校の免許に必要な「介護等体験」については、「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律」（1997 年 6 月）で規定された。
- *3 後述のように、授業の冒頭で本資料も配付し、下線部は学生に読んでもらい、その内容を確認した。
- *4 以下は中学校学習指導要領である。小学校・高等学校も基本的には同内容である。
- *5 これは 2011 年度前期のものであるが、他の年度もほぼ同一である。
- *6 新学習指導要領では小中高ともに「総合的な学習の時間」は「領域」とされ、独立した章において取り扱われるようになった。
- *7 文部科学省は新学習指導要領告示に当たって「理念は変わりません。学習指導要領は変わります。」という言い方をした。理念というのは「生きる力の育成」であり、これは新指導要領においても変わらないというのが文部科学省の一貫した立場である。
- *8 「総合演習」は昨年度まで教職担当者 2 名が担当していた。そのためアンケートの対象者の中には、私以外の担当者の授業を履修した学生も含まれている。本来であれば区別すべきであるが全体の回答が少ないことに加えて、学生自身の活動についての意見が中心となるため、本節では区別をしない。
- *9 ここでは 2010 年度前期の担当授業のレポートの記述から代表的と思われる部分を原文のまま抜粋した。なお以下での学生の文章の引用は原則として原文のままであるが、誤字脱字や文章表現の明らかな誤りは訂正、補筆等を行った。
- *10 自由記述はすべての回答を掲げた。

（ともの きよふみ 総合教育センター）